

黒田清輝氏(一)

「展覧會が間近いので皆製作に忙しく、或者は旅行先で製作して居る。東京に居る者は殆ど終へたものと、未だ着手中のものもある。

外國にある洋畫の研究者も二三年前から數が多くなつた。多い中には著しく技術の進歩したものもある。ドイツ、イギリス、ベルギー等にも二人宛散在して、切りに勉強して居るやうだ。中にも巴里は一番多く繪畫の研究が集つて居る。

この、暮から來春にかけて、懇意な人の三四人、即ち藤島武次、湯淺一郎、山下信太郎等の諸氏が歸る筈で、來年の文部省の展覧會などは一層盛況を呈するであらう。

日英博覽會へも出品の目的で多少勉強して居る向もあらうが眼前の展覧會があるゆゑ、餘り氣が乗らないらしい、それに又た日本では賛同しなかつたそうだが、ベルギーにも萬國博覽會様のものが組織される故、英國にゆく人は近くもあるから序に見るのは好い機會であらうと思ふ。新聞の報ずる所に由れば、明後年は伊太利統一の百年紀念に當るので、萬國博覽會をやると言ふ話だ。伊太利は復興期に於ける繪畫の中心地で、歐洲繪畫の淵源とも思はるゝ場所故、各國から寄つた作品を見るといふ上に、又立派な模範的美術を見る事ができる。これこそ繪畫に志すものに取つて此上なく有益なる博覽會であらうと思ふ。若しも時が許すならばそれも見るが可い」(皓生)